

老いと死の「錬金術」 —— イェイツとゲーテ ——

浅井 雅志

これでも若いときには、命があつて、恋もした。

[……]

ところが意地悪ものの『老い』がやってきて、

杖でしたたかおれを打った。

おれはひよろひよろ墓のほうへよろけた、

ちょうどその墓が戸口を開けて待っていた⁽¹⁾。

Grant me an old man's frenzy.

Myself must I remake ⁽²⁾

“[……] youth is the one thing worth having.” (Oscar Wilde 163)

1

W・B・イェイツ(1865-1939)がその詩的創造力の頂点を迎えるのは、多くの詩人の場合その枯渇が感じられはじめる時期、すなわち老いを自覚するようになる時期以降である。この点でもう一人特筆すべきはゲーテ(1749-1832)で、二人の例は単に西洋の長い詩的伝統において稀有というだけでなく、人間の生理と芸術的創造力との間の内的連関性を考察する上でまたとない材料を提供してくれる。本稿では二人の老いおよび死についての想念、およびそれとの格闘が、彼らの思索と創造においていかなる役割を果たしたのかを考えてみたい。

老いて一層創造力が飛躍したこと以外にもイェイツとゲーテの共通性は多い。地上の生の肯定、若さの渴望、それとは逆に、老年がもたらす叡智への自負、宗教的な悟りなどの超越的な解決の拒否、老いてなお恋愛に執着したことなどである。イェイツ自身、ゲーテを“Unity of Being”探求の旅の同行者と見ている(*Auto* 354)。また、既成の宗教に飽き足らず、自分の宗教を作ろうとした点もよく似ている。若きゲーテはこういつている。「私も自分の宗教を作りうるのだということは、至極当然なことに思え、至って気楽にそれを行なった。新プラトン主義がその基盤をなし、錬金術的なもの、神秘主義的なもの、カバラ主義的なものが加えられていた」(『詩と真実』227)。イェイツもこういう。「私はとても宗教的だったが、大嫌いなハクス

リーとティンダルに子供時代の素朴な宗教を奪われてしまった。それで私は新しい宗教を作らねばならなかったが、それはほとんど不可謬の詩的伝統の教会であった」(Auto 15-16)。彼の「新しい宗教」には後に、ゲーテが言及している新プラトン主義に始まる諸要素が濃厚に染み渡ることになる。

中でも注目すべきは恋愛と創造力との関係である。イエイツはモード・ゴンへの長期にわたる叶わなかった愛の後、51歳でその娘イズールトに求婚するが拒絶される。52歳でジョージ・ハイド・リースと結婚し、二子をもうける。しかしその後性的能力の減退を感じ、69歳のとき、「メフィストフェレスとの契約」の現代版とも呼びたいシュタイナッハ手術を受ける。この手術についてイエイツは書簡で「創造力を回復すると同時に性欲も回復してくれた」(Foster 582)と書き、手術の成功を信じるとともに、性欲と創造力との間に強い関係があると考えていることも示唆している。しかしこの手術の効果は現在の医学では否定されているので、これがイエイツの幻想(いわゆるブラシーボ効果)であった可能性は高い⁽³⁾。フォスターも「性欲と性的能力は別のこと」(582)と冷たく見ている。しかしたしかに彼はこれ以後、マーゴット・ラドック(彼女に送った“Margot”と題された詩には、“The Age of Miracles renew, / Let me be loved as though still young / Or let me fancy that it's true”(776)という臆面もない表現が見られる)やエセル・マニン、ドロシー・ウェルズレー、イーデイス・シャクルトン・ヒールド、モヤ・ルウェリン・デイヴィーズ、イセル・カルクホーン、ベティ・ペラムといった女性と、性的な幻想(ときには実行)を濃厚に伴う関係をもっている。またオリヴィア・シェイクスピアとは生涯にわたって関係を続けた。フォスターが、「はっきりしているのは彼が性愛に心を奪われ、それに応える誰かを見つけようと決意していたことだ」(583)というように、この手術を通して彼が女性との性的関係を復活させ、それによって詩的創造力を回復させようと思っていたことに間違いはあるまい。現に、イエイツの詩的創造力がもつとも横溢したのは晩年においてであったことは衆目の一致するところで、いわゆる傑作群は60歳を越える頃から書かれはじめる。1927年に発表した“The Tower”で、62歳のイエイツはこう書いた。

What shall I do with this absurdity—
O heart, O troubled heart—this caricature,
Decrepit age that has been tied to me
As to a dog's tail?
Never had I more
Excited, passionate, fantastical
Imagination, nor an ear and eye
That more expected the impossible—” (240)

通常なら創造力が衰える年齢になって“absurdity”と呼ぶしかない想像力の噴出が起きたと

いうのだが、彼はこのことと性への執着との間に密接な関係があると信じていたようだ。死の前年には手紙で「第二の少年期は元気いっぱいだ」(Foster 611)と書いている。同じ年に書いた“The Wild Old Wicked Man”は「わしは女に眼がないから」(357)という言葉で始まり、同じく“Politics”の最後は、世間は戦争がどうのと騒いでいるけど、「でももう一度若返って／あの娘を腕に抱けたらなあ」(395)という身もふたもない言葉で締めくくられる。“Sailing to Byzantium”にある“unageing intellect”どころか、エリオットがいうように、「年をとるにつれて若返った」といえそうだ。それはイエイツ自身が自負するところでもあった。1924年、ノーベル賞の受賞メダルを見ながらこういつている。「私もかつてはこのメダルに刻まれた若者のようにいい顔をしていたが、私の未熟な詩は弱点だらけだった。いわば、私のミューズは老いていたのだ。しかし今、私は老い、リユーマチに悩んで見る影もないが、私のミューズは若いのだ」(Auto 541)。

ゲーテにおいても同様の関係が見られる。14歳のときグレートヒェンという年上の娘に失恋するが、彼女の名前は『ファウスト』第一部のヒロインの名となる。16歳でライプツィヒ大学に行くとアンナ・シェーンコプフに恋をし、21歳でシュトラスブルク大学に行くとフリーデリケ・ブリオンと恋に落ちる。この体験は多くの抒情詩を生み、さらには『ファウスト』のグレートヒェンの悲劇の原型になった。23歳でヴェッツラーに移ると15歳のシャルロッテ・ブッフと恋に落ちるが、彼女は友人ケストナーと婚約していた。失意の中フランクフルトに戻ったゲーテは、彼女の結婚が近づくと自殺すら考えた。そんな折、ヴェッツラーの友人イェルザレムが人妻への失恋からピストル自殺する。この友人の自殺とシャルロッテへの恋という二つの体験を契機として『若きウェルテルの悩み』を執筆し、ベストセラーになる。26歳のときにはリリー・シェーネマンと恋に落ち、婚約にまで至るが結局解消される。しかしこの体験からも多くの詩が生まれた。同じ年、ゲーテはカール・アウグスト公からの招請を受け、永住することになるヴァイマルに移る。この地で、33歳ですでに7人の子供がいたシャルロッテ・フォン・シュタイン夫人と恋愛関係に入り、ゲーテがイタリア旅行に立つまで12年間続いた。この恋愛からも多くの詩や『イフィゲーニエ』や『タッソー』などが生まれ、彼の文学が「シュトルム・ウント・ドランク」の時代から古典主義へ移行する契機となった。最初のイタリア旅行から戻った直後の1788年にはクリスティアーネ・ヴルピウスという23歳の女性を恋人にし、後に内縁の妻とした。正式に結婚したのは約20年後、ゲーテ57歳のときである。58歳になるとヴィルヘルミーネ・ヘルツリープという18歳の娘に恋をし、この体験から17編のソネットと『親和力』が書かれた。61歳で『日記帖』という、自然な性愛を称えるきわめてエロティックな詩を書くが、誤解を怖れて生前には印刷しなかった。さらに72歳になったゲーテはウルリーケ・フォン・レヴェツォーという17歳の少女に最後の熱烈な恋をした。74歳になってアウグスト公を通じて求婚するも断られ、この失恋から「マリエンバード悲歌」が書かれ、またこれを契機として『ファウスト』第2部が完成される。

このように、両者には性的関心と詩的創造力との間に明らかな関係が見られる。つまり、恋

愛を契機として老年が若年を上回る創造力をもつに至るのだ。

2

The Tower 以降の詩集に見られるイエイツの基本的な姿勢は、来し方を振り返り、その喪失をなつかしみ、嘆くが、その深い喪失感の中で、自分の人生とは一体いかなるものだったのかを検証しようとするものである。“The Tower” ではこう歌っている。“I pace upon the battlements and stare / ... / And send imagination forth /... and call / Images and memories / From ruins or from ancient trees, / For I would ask a question of them all” (241)。この検証の作業の中で「若さ」と「老い」は衝突する。両者を経験し、それぞれの長所と短所を切実に感じる詩人は葛藤に陥る。

ゲーテ畢生の大作『ファウスト』冒頭の「捧げることば」にも、晩年のイエイツと同様の思いが表れている。

また近づいてきたか、揺らめく影たちよ、
かつて私のおぼろな眼に浮かんだものたちよ。
いまこそおまえたちをしかと捉えてみようか。
[……]
わたしの胸はわかわかしくときめく、
[……]
おまえたちは楽しかった日々の数々の思い出を運んでくる。
なつかしい人たちの面影の数々が浮かび出る。
なかば忘れられたふい伝説のように、初恋も初めての友情もよみがえる。
苦しみは新たになり、嘆きはまたも人の世の
悲しいさまよいをくりかえす。
かりそめの幸にあざむかれて、美しい青春を奪われ、
わたしに先立って逝った親しい人々の名をわたしは呼ぶ。
[……]
わたしがいま現実に見ているものは遠い世のことに思われ、
すでに消え失せたものが、わたしにとって現実となってくる。(1: 9-11)

晩年のゲーテも若さの喪失を嘆くが、それでもこう言う。「わたしの歌はいまようやくつぶやきをとりもどして、／おぼつかなくもエオルスの琴のように鳴りはじめる」(1: 11)。ここでも「若さ」と「老い」は葛藤するが、しかしこの葛藤そのものが、二人の詩人に、通常の詩人であれば詩想が枯渇する人生の最終局面において、巨大な、そして人生で最大の想像力・創造力

を付与したのであろう。

この葛藤が創造力を生む「力学」をもう少し仔細に見ていこう。ファウストは第一部の冒頭でこう嘆く。

おれはもう、遊びにうつつを抜かすには齢をとりすぎ、
まだ、望みを断って暮らすには若すぎる。
世界がおれに提供できるものは何だというのだ。
それもない、あれもない、ただ我慢しろ。
これが、生きているあいだにひっきりなしに
いやな声でうたわれて、
誰の耳にも聞こえてくる
永遠の歌だ。(1: 112)

このファウストの欲望を柴田翔は「欲していることを今すぐ手に入れたい」欲求と見て、「青春幻想」と呼ぶ。そしてゲーテの一生を、この欲望が幻想にすぎないことの悟りを経て、なおかつそこにとどまらず、晩年にいたってそれが再浮上し、爆発的な創造力の源になったと考える(17)。この嘆き以前のファウストは、イエイツの仮面の一つであるマイケル・ロバーツと同様、人類の叡智を探求し、生の謎を明らかにすることに没頭していた。しかし老いを感じる今、その探求の不毛さに打ちひしがれている。

[……] おれはあくせくと、
人間精神の生んだあらゆる宝を掻きあつめ、
さてとどのつまりこうして腰をおろして考えてみると、
おれの内部になんの新しい力も湧いてこない。
髪の毛一筋ほどもおれの背たけは伸びず、
おれは「無限」に一足も近づいてはいないのだ。(1: 128)

そこで彼はほとんど反動的にこういう。

おれは陶醉に身をゆだねたいのだ。
悩みに満ちた享楽もいい、恋に盲いた憎悪もいい、吐き気のくるほどの歓楽もいい。
さっぱりと知識欲を投げすててしまったこの胸は、
これからどんな苦痛もこばみはせぬ。
そして全人類が受けるべきものを、
おれは内なる自我によって味わいつくしたい。

おれの精神で、人類の達した最高最深のものをつかみ、
人間の幸福と嘆きのすべてをこの胸に受け止め、
こうしておれの自我を人類の自我にまで拡大し、
そして人類そのものと運命を共にして、ついにはおれも砕けよう。(1: 125)

ここには、バイロンに深く共感した近代人ゲーテ⁽⁴⁾の、シュトルム・ウント・ドランク時代を
髣髴とさせるロマンティックな側面が如実に表れている。メフィストフェレスはそのロマン
ティックなのぼせ上がりにつけこんで、理性の放棄をそそのかす。

だから、さあ出発だ。考えごとはいっさいやめて、
まっしぐらに世の中に乗り出しましょう。
私の言いたいのはこうだ。思案にふけて日を送っている人間は、
悪霊にとりつかれて、草のないところを
いつまでもぐるぐるまわっている牛や馬も同然です。
そのまわりには、美しいみどりの牧場がひろがっているのに。(1: 129)

そして、彼の誘いに乗ったファウストが去った後、こう一人ごちる。

理性と知という
人間にさずかった最高の力をいよいよ軽蔑するがいい。
[……]
これであの男は完全におれのものだ。
あの男は運命から、しゃにむに
前へ前へと突進する精神をさずけられた。
あんまりせっかちに走り続けるから、地上の快樂を素通りしてしまったのだ。
これからはふしだらな生活や
他愛もない茶番劇のなかにまきこんで、
[……]
永遠の飢えと乾きに身もだえさしてやる。
そうすりゃ、きやつめ、おれに身売りをしていなくとも、
破滅に落ちるほかはないのだ。(1: 131)

かくしてファウストはメフィストの罠にはまるのだが、しかしこれはそもそも彼自身が求めていたものだ。つまり、「ついにはおれも砕けよう」と、破滅を覚悟した上で「理性」を棄てて「陶醉」を取ったのだ。イエイツが老いを感じ始めたとき、彼もこの「理性の軽蔑」を共有

していた。たとえば *A Vision* の第2版の序文では「しかし今や、ブレイクにもスウェーデンボリにもベーメにも、またカバラの秘教にも私の役に立つものは何一つなかった」(12)と嘆き、“The Tower” ではこう書いた。“I mock Plotinus’ thought / And cry in Plato’s teeth” (244)。こうした言葉はファウストのそれと響きあうものがある。しかしイエイツは「陶醉」だけを求めているのではない。結婚後には妻の自動筆記の「師たち」に導かれて歴史の研究におもむくのだから、抽象こそ忌避されるが、理性と知が完全に捨て去られたわけではない。現に“The Wild Old Wicked Man” では、若者には“love”と“touch”しかないが老人には“words”があり、しかも「心に染みとおる言葉」は若者にはもてないままでいっている。ここでの「言葉」は、ファウストが自嘲する「あくせくと、人間精神の生んだあらゆる宝を掻きあつめ」たものではなく、老人にしか獲得できない(しかし超越的なものではない)叡智だろう⁽⁵⁾。

しかし、そうした違いはあるにせよ、イエイツもゲーテも、通常老齢と呼ばれる年齢に差しかかる頃、それまでの知的な探求に懐疑(ファウストの場合には絶望に近いが)を抱き、探求の方向を大きく変えていく点で共通している。それは、老いという人間の生の必然を一つの大きなショックと捉え、そこから通常生まれる否定的な意識や感情を創造的エネルギーに変換する、いわば錬金術的な技法である。

『ファウスト』第1部の刊行が1808年、その後長く中断し、第2部に本格的に着手したのは1825年、ゲーテ76歳である。そこに登場する得業士はこう。「実際、老いというのは一種の病気だ」(2: 154)。たしかにこれは血気盛んな若者の言葉だからゲーテの本音と取るべきではないかもしれない。しかしファウストが魂を売ってまで手に入れたのが若さであるなら、彼の考えの一側面を代弁したものとも解釈できるだろう。これは三島由紀夫の言葉を思い起こさせる。最後の大作『豊饒の海』の最終巻『天人五衰』で、三島は主人公にこういわせている。「老いは正しく精神と肉体の双方の病気だったが、老い自体が不治の病だということは、人間存在自体が不治の病だというに等しく、しかもそれは何ら存在論的な哲学的な病ではなくて、われわれの肉体そのものが病であり、潜在的な死なのであった」(270)。この作品の擲筆の日を自決の日と決めて執筆していた三島にとって、これは本心の吐露以外の何ものでもなかったであろう。

しかしゲーテは、先の得業士の言葉に対して、すぐにメフィストにこういわせている。「阿呆め、[……] いまにその高慢の鼻をへし折られるぞ、[……] むかし誰かが考えなかったようなことは一つとしてないということがわかってきてな」。そして観客に向かってこういう。「悪魔は年をとっている。だから悪魔の言うことがわかるには、早く年を取ることですよ」(2: 156)。どうやらゲーテはメフィストに「伝道の書」にある「日の下に新しきものなし」的厭世観を語らせることで、若さを全面的に賛美する得業士を揶揄し、若さの無知を批判しているようだ。しかし、かといって老人の叡智を強く肯定していると取るのも間違っていよう。そもそも魂を売ってまで若さを求めたのはファウストその人だし、メフィストでさえ妖女ラーミエたちになぶられると、「アダムこのかた男は馬鹿にされどおしだ。齢はとるが、利口にはなら

ん」(2: 218-19)と嘆いている。ゲーテの若さと老いに対する想念はイエイツ同様きわめてアンビヴァレントだというべきだろう。

老いと死の超克を芸術的想像力・創造力の源泉にした点で、三島はゲーテやイエイツと共通性がある。すなわち、老いという「不治の病」をもつ存在の生をいかに美しく終わらせるかという命題を自らの前に掲げることで、老いをいわば先取りし、その醜さを想像することによって自らの創造力を掻き立てたのだ。老いと死を人間が本性的にもつ「病」と見る彼は、いかにしてそれを超克するかを、自らの生と芸術双方の指針とした。つまりその超克は、生と芸術の双方で行われねばならなかったのだ。それは彼にとって、同時に起きるべきもので、しかもこの「病」を超克するとは、彼にとっては「何ものかへの橋、そこを渡れば戻る由もない一つの橋」(『太陽と鉄』79)を渡ることであつた。その「何ものか」とは「絶対」であり、したがってこの橋を渡るとは、意志的な死によって老いと死という「病」を一挙に乗り越えることであつた。これが三島の他の二人との決定的違いである。つまり彼は老いの意識を単に創造力の源にするだけでなく、その超克を現実世界で実行し、その結果、創造という行為そのものを無効にした。彼にとっての主眼はあくまで老いという「病」の治癒と生の「完成」にあり、芸術はその手段であり副産物であつた。一方イエイツとゲーテはこの世界にとどまり、老いを、直視したりパロディ化したりしながら、自らの前に掲げることで更なる創造力をかきたてようとした。イエイツは、そのものずばりの“The Spur”(拍車・刺激)(1938)という詩を書き、半分茶化するような調子でこう歌う。“You think it horrible that lust and rage / Should dance attendance upon my old age; / They were not such a plague when I was young; / What else have I to spur me into song?”(359) 老いによって失われた色欲と激情からなおも創造の刺激を受けようというのだ。シュタイナハ手術を受けたイエイツにはたしかに若さの復活をこいねがう「懐古的」姿勢も見られる。しかしこの詩には、老いと、その副産物である色欲と激情の減退によって生まれた現状と、それらが自然なものであつた壮年期とのギャップを逆手にとって、それを意識することから生じる痛みと悔恨を「拍車」にして創造力を高めようという詩人の意志と戦略が表れている。

ではゲーテとイエイツの死についての想念はどうだろう。ファウストは「いつも不安を吹き込む」「憂い」と呼ばれる女にこう語る。

おれはただひたむきにこの世界を駆けめぐつたのだ。

あらゆる快樂を、襟髪をつかんでわがものにした。

[……]

そしてまた新たに欲求して、嵐のように

生き抜いた。[……]

[……]

天上のことは人間にはうかがい知れぬのだ。

その天上をまぶしそうに見て、

雲の上に自分に似た者がいるなどと思いこむのは、馬鹿者のすることだ。

それよりは、この地上でしっかりと足を踏みしめて、自分のまわりを見ることだ。

有為の人間にはこの世界は反応なしではない。

どうして永遠界へさまよい出る必要がある。

[……]

そのようにして先へ先へと進んでゆくことを、苦しみとも喜びともするのだ、

どうせ、そういう人間はどんな瞬間にも満足することはないのだから。(3: 213-14)

ゲーテはこうも語っている。「この世ですでにれっきとしたものになろうと思い、そのため、毎日毎日努力したり、戦ったり、活動したりしなければならない有能な人間は、来世のことは来世にまかせて、この世で仕事をし、役に立とうとするものだ。その上、不死の思想などというものは、現世の幸福にかけては、最も不幸であった人たちのためにあるのだよ」(『ゲーテとの対話』(上)117)。

吉本隆明も同様の考えを述べている。高村光太郎の「死ねば死にきり／自然は水際立っている」という詩句を、「自然には勝てません」、「浄土で再び生きるといようなことは一切無用であるし、ない」(248)と解し、死や死後のことは考えなくていいという。吉本はまたミシェル・フーコーの死生観にも共感する。すなわちフーコーは、死は生から点や線で区切られるものではなく、生とは「全然別の次元……生まれてから死ぬまで全部を照らしてみることができる場所」にあるものだと考えたといい、これは「非常にいい考え方」(232)だという。

これらは表現の違いはあれおおむね同質の精神である。ゲーテの「万物は回帰するのであって、ただの一度しか存在しないようなものなんて、この世にはない」(『ゲーテとの対話』(上) 77-8)という言葉は、「永遠界」の拒否という先のファウストの言葉と矛盾するように見えるが、「万物は回帰する」とは、愚かな者が求める不死あるいは永遠界とは別物であって、前者を信じるならば後者を求める必要はない。それは次の言葉からも明らかだ。「常に現在というものに密着していることだ。どんな状態にも、どの瞬間にも、無限の価値があるのだ。なぜなら、それは一つのまったき永遠の姿、その代表なのだからね」(同書 82)。現在という瞬間を永遠の顕現と捉えるこの見方は、超越的救済の拒否と地上の生の肯定へとつながる。そしてこの姿勢を「運命愛」と「永劫回帰」という思想の極北に結実させたのは、熱烈なゲーテ讃美者であったニーチェである。「私は、いよいよもって、事物における必然的なものを美と見ることを、学ぼうと思う、—— こうして私は、事物を美しくする者たちの一人となるであろう。運命愛 (*Amor fati*) —— これが今よりのち私の愛であれかし！ [……] 私はいつかきっとただひたむきな一個の肯定者(ヤー・ザーゲンダー)であろうと願うのだ！」(『悦ばしき知識』249)。そしてついに『ツァラトゥストラ』では、フーコーのごとく死を別の次元に追いやってしまう——「地上に生きることは、かいのあることだ。[……]『これが——生だったのか』わたしは死に向かっ

て言おう。『よし！ それならもう一度』と」(516)。

イエイツもまた、この精神の系譜に深く連なる者であった。“A Dialogue of Self and Soul”
で彼の分身と思しき “My Self” はこういう。

A living man is blind and drinks his drop.

What matter if the ditches are impure?

What matter if I live it all once more?

[.....]

And what's the good of an escape?

[.....]

I am content to live it all again

And yet again, if it be life to pitch

Into the frog-spawn of a blind man's ditch,

[.....]

I am content to follow to its source

Every event in action or in thought;

Measure the lot; forgive myself the lot!

When such as I cast out remorse

So great a sweetness flows into the breast

We must laugh and we must sing,

We are blest by everything,

Everything we look upon is blest. (286)

「逃避して何になる。この生がいかに汚辱にまみれていようと、それを何度でもくりかえすことに私は満足する」とイエイツは高らかに宣言する。悔恨を振り捨て、笑い歌うことでわれわれはあらゆるものから祝福されるという彼は、さながらツァラトゥストラの分身のようだ。

この「祝福されている」という神秘的な幸福観は、4年後に書かれた “Vacillation” という詩でも述べられる。

My fiftieth year had come and gone,

I sat, a solitary man,

In a crowded London shop,

An open book and empty cup

On the marble table-top.

While on the shop and street I gazed
 My body of a sudden blazed;
 And twenty minutes more of less
 It seemed, so great my happiness,
 That I was blessed and could bless. (301)

50歳をすぎてなお孤独な初老の男が、ロンドンの喫茶店で読み止しの本と飲み終えたコーヒーカップを前にぼつねんと座っている。しかし通りを見つめているうちに突如身体が燃え上がり、しばらくの間とてつもない幸福を感じ、祝福され、また自らもすべてのものを祝福できると感じる。その原因は詩人本人にもわからないのだが、彼が孤独に沈潜し、その来し方行く末に思いをはせている間に、ふと老いと死へのわずらいから解放されたのであろう。これは一見僥倖に見えるが、しかし偶然のものではない。まさにファウストのあの自負、「おれはただひたむきにこの世界を駆けめぐるのだ。あらゆる快楽を、襟髪をつかんでわがものにした。嵐のように生き抜いた」という確信が突如無意識を突き破って噴出してきたのだろう。ゲーテがイタリア旅行で感じたものもこの感覚に近い。「ああ ローマにいるこの幸せよ [……] これは夢ではあるまいか」(高橋 88-89)。この地で彼は「自己自身との一致」という思想に達するが、それはスピノザ的な「必然性」に強く支えられていたと高橋義人はいう(108)。この姿勢は、ニーチェの「必然的なものを美と見ることを学ぼう」とする姿勢、あるいはイエイツのすべてを祝福する感覚と同質のものであり、ゲーテのいう「どんな状態にも、どの瞬間にも、無限の価値がある、それは一つのまったき永遠の姿だ」という思想の具現化である。

しかし先に引いたファウストの、「地上でしっかりと足を踏みしめて、自分のまわりを見ることだ。[……] どうして永遠界へさまよい出る必要があろう」という言葉は、ここではまだ虚勢、あるいは自分に向かって言い聞かせているようにも聞こえる。「そういう人間はどんな瞬間にも満足することはない」というときの「人間」に、自分も忍び込ませているかにも思える。しかしこの逡巡は結末に至って、以下の辞世の言葉に昇華される。「それは人智の究極の帰結で、こうだ。／およそ生活と自由は、日々にそれを獲得してやまぬ者だけが、はじめてこれを享受する権利をもつのだ。／[……] おれは瞬間にむかってこう言っている、『とまれ、おまえはじつに美しいから』と。／おれの地上の生の痕跡は、永劫を経ても滅びはしない、—／こういう大きい幸福を予感して、／おれはいま最高の瞬間を味わうのだ」(223-24)⁽⁶⁾。メフィストに魂を売り渡して若返り、清純なグレートヒェンを手に入れ、結果的に彼女を破滅させ、さらには美の化身であるヘレナまでも冥界から地上に呼び戻してわがものとしたファウストではあったが、最終的には、若さそのものは生の問題の根本的な解決にはならないと悟る。そうではなく、生成流転する日々をいかに生きるかが生の価値を決めるのであり、その生を永劫に残るものにするには、若さ対老い、そして生対死という二律背反を、これを二律背反と見る見方自体を超えねばならない。これを二律背反と捉えるのは、運命から「しゃにむに前へ前

へと突進する精神をさづけられた」人間、「自らの自我を人類の自我にまで拡大し、人類と運命を共にして、ついには砕けよう」とする人間、要するに自我の無限の拡大を求める近代人である。どの一瞬も永遠だという認識を失った近代人である。彼ら、すなわち自らが直面した「若さ対老い」、「生対死」というアポリアに対する根源的な解決は生の絶対肯定にこそあると見た点で、ゲーテとイエイツは一致する。「自我の無限の拡大を求める」こと自体中世的な運命観の否定であり、近代の宿痼の始まりであったが、両者とも過去に逃避せず、イカルスのように墜落死するファウストとヘレナの子、敬愛するバイロンをモデルにしたといわれるオイフォリオンの、「どこまでも高く登っていかなくては。どこまでも遠くを見なくては」(3: 102)という近代人特有の宣言を実行した。

手塚富雄は、ファウストが「最高の瞬間と呼んだものは、彼の自我が人類の自我に拡大され、その人類によって生生(ママ)発展して担われるべき動的瞬間」(3: 303)であり、「個人的な立場はほんとうに遠い未来にかけての何百万の人を思う心に止揚された」(3: 301)といい、この「自我の拡大」を注(6)で触れたゲーテの共同体志向と捉えている。しかしこの「拡大」は、人間がその理と知によって、かつての中世的宿命観を乗り越え、自我を恃んで宇宙の中心的存在になろうとする欲求を表しているとするべきだろう。これはさまざまな近代特有の病を生み出したが、ゲーテとイエイツは決して超越界に解決を求めず、地上の生の肯定によってこれを超克しようとした。まさにこの姿勢こそが、彼らが老いを創造力の源に変換する「錬金術」の要石となっているのだ。

手塚によれば、ゲーテはファウストの「不死の霊」を最初は Entelechie としていたという。これは「テロスに達している状態」で、後にドリーシュが生命の非物質的原理すなわち生命力そのものと捉えたものである。夭折した子供たちの霊も成長すると考えたゲーテであれば、ファウストが、そして「生活と自由を求めてやまぬ」人間が、「肉体は死んでもエンテレヒーは永存して活動する」(3: 308)と考えたとしても不思議はない。これは、同時代人ブレイクの「エネルギーは永遠の歓びなり」と符合する見方で、老いと死を超える思想である。「個人的宗教」を作ったとの廉でロレンスらとともにイエイツも批判したエリオットは、イエイツの死後、「詩人として成熟することは、完全な人間として成熟することです。年齢に応じた新しい感情を、青春の感情と同じ強烈さで経験することです」(250)といい、イエイツをそれを体現した詩人、「年をとるにつれて若返った詩人」(253)と評した。同じ言葉がゲーテにも捧げられてしかるべきだろう。

3

イエイツとゲーテの親近性を見てきたが、では相違は何か？ その最大のものの一つは二人の宗教観だろう。ファウストはその結末で、ある意味では意外にも昇天するが、ゲーテはその理由をこう述べる。「どんな人にせよ、絶えず努力して励むものを、／わたしたちは救うこと

ができます。それにこの人には天上からの／愛が加わったのですから、／至高の幸に住む天上の群れは、／心から歓んでいまこの人を迎えるのです」(3: 249-50)と。ゲーテ自身この詩句を「ファウスト救済の鍵」だとし、「ファウスト自身の裡に[……]ますます純粹になっていく活動があり、天上から彼を救おうとする愛があるということだ。このことは、われわれが自己の力だけではなく、さしのべられた神の恩寵が加わってはじめて昇天できるのだという、われわれの宗教観と完全に一致している」(『ゲーテとの対話』中 305-6)とエッカーマンに解説している。そして作品の結末では「輝く聖母」が出てきて、「永遠の女性、／われらを高みへ引きゆく」(3: 261)という有名な言葉で幕が下りる。ほとんどキリスト教のアレゴリーと見紛うばかりで、人生の最後の最後で、前節で見た、天上に「逃避」せず、生を絶対肯定することに近代人が直面した問題に対する根源的な解決を見出そうとする姿勢を放棄したかに見える。

実は第一部の冒頭ですでに、ファウストの知らないところで、主(神)はメフィストとのやり取りの中でこう予言していた。「あれ[ファウスト]はいまのところ戸惑いしながらわしに仕えているが、／やがて澄み徹った境地へかれをみちびくことになろう」(1: 29)と。いや、そもそもメフィストにファウストを誘惑させたのも、すぐ安息を求める人間に刺激を与えるために神自身が仕組んだものだった。「人間の活動はすぐたゆみがちになる、／すぐ絶対的な安息を求めたがる。／だからわしは、刺激したり引き込んだりする仲間を人間につけておく、／それを悪魔としてはたらかせておくのだ」(1: 31)。何とも深遠な神の配慮ではないか。

先の「解説」に続いてゲーテはさらに創作の「楽屋裏」を披瀝する。「もし私が自分の文学的な意図に、輪郭のはっきりしたキリスト教的、教會的な人物や觀念をとおして適当に制限できる形態と緊密さをあたえなかったら、ああいう超感覚的な、ほとんど想像もつかないようなものは、どうやってみても茫漠として、まったく捉えどころのないものになってしまうだろう」(『ゲーテとの対話』中 306)。つまり昇天という確固としたキリスト教的表象は超感覚的なものを表現するためのいわば方便で、キリスト教的な救済を意図したものではないというのだ。しかしゲーテは神を否定しない、どころか讃美する。「神を承認すること、これこそ真に現世の至福である」(『箴言と省察』203)と。しかし彼の「神」はキリスト教の神ではなく、「神の器官としての自然を否定する者は、ただちにあらゆる啓示を否定するがよい」、あるいは「自然はつねにエホバである」(同書 203)という言葉からわかるように、自然としての神である。これがスピノザの「神即自然(*deus sive natura*)」の反響であることは明瞭で、ゲーテ自身、最も大きな影響を受けた人物として、リンネとシェイクスピアと並んでスピノザを挙げ、「私の考え方全体に大きな作用を及ぼした」(高橋 68)といっている。しかしこれは影響というよりも、ゲーテの中に兆していた反キリスト教的な思いを理論的に支える役割を果たしたと見るべきだろう。近代初期を生きたゲーテにはあからさまなキリスト教批判は見られない。しかし1773年、若きゲーテは牧師から非キリスト教的な性向を咎められ、ルッター派への改宗を強いられた(高橋 68-69)という。彼の中に芽生えつつあった神は、クセノファネスに淵源するとされる「一にして全(*hen kai pan*)」たる汎神論的な神であり、それを最も見事に表現したスピノザに自ら

の援軍を見出したのだ。スピノザは「神は、あらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」(100)といい、神を内在神に限定したが、結果的に超越神の存在を否定したと見られ、異端視された。スピノザにとって存在する唯一のものは自然であった。その多くの詩に見られるように、ほとんど自然神秘主義とも思えるほど自然から大きな靈感を受けていたゲーテにとって、これは完全に肯定すべき見方であった。

しかし、にもかかわらずゲーテは、『ファウスト』の結末において、超越的に見える救済をその主人公に与えた。これは、いかに内在神とはいえ、「一にして全」なる神を保持していたからであろう。この作品の謎めいた結語、「永遠の女性、／われらを高みへ引きゆく」についてシュタイナーは、「永遠に女性的なものというのは、精神界によって受精して透視的・魔術的な行為のなかで精神界と合生する心魂の力」であり、「それが人間を永遠の領域にひきあげ」る。そして「目に映るものすべてのなかに、現実ではなく永遠なるものの比喩を見るとき、私たちは物質界を初めて正しく見る」(180)と述べて、ゲーテにおける「内在」と「超越」は有機的に関係していると解釈している。そうであるにせよ、近代人の眼がゲーテの中に超越的なものに救済を求める中世的姿勢の残滓を認めたとしても不思議はない。そしてまさにその近代人だったイエイツはこうした予定調和的な構図も結末も、幸福の絶頂で昇天することも望まなかった。

イエイツもファウストと同じく「絶えず努力して励むもの」であった。ゲーテのように「永遠はすべてのなかで常に生じる」(シュタイナー 181)と信じていた。しかしイエイツの姿勢は、「天上からの／愛が加わ」り、「至高の幸に住む天上の群れ」が「心から飲んで迎える」ことを心待ちにするものではなかった。彼の詩は、瞬間の中に永遠を見ることと、人間の実存の苦悩を宗教的・超越的な形で救い上げることとを峻別している。ゲーテはファウストを「逃亡者」「放浪者」「この世の仲間はずれ」で「神に追放された」(1: 246-47)人間として創造した。そこには近代の萌芽をはっきりと見える。しかしそうした「近代的」苦悩はあるにせよ、近代の黎明期を生きたゲーテにはいまだキリスト教的救済観は濃厚に残っていた。なればこそ彼は、「スピノザが異端視されている当時の社会情勢を考慮し、スピノザを真の有神論者として擁護」(高橋 73)したのである。

成熟期の筋金入りの近代人、「神の死」以後の近代人であったイエイツは、こうした時代への配慮から自由で、超越的救済を拒否して、性愛や激情を含めた地上の生の肯定を貫徹した。それゆえ「最後のロマン派」を自負するイエイツが、ロマン主義を「乗り越えた」ゲーテにアンビヴァレントな感情を抱いたとしても不思議はない。彼はこう書いている。「ゲーテはかつて生きた人間の中で最も成功し、かつ最も病的でなかった者の一人だが、それでもそんな思いを抱いていた」。「そんな思い」とはゲーテの言葉、「もう長い間私は、友人の死を聞いてうらやまないことはなかった」(Foster 276)というものだ。成功の只中であって死を憧憬する人間にある種の共感を抱くと同時に、その一方で、人間を「未完のアーチ」と考え、それゆえ生を「最終目標」とは見ないイエイツは、「個人の努力と意志で偉大なことを成し遂げた途端にわ

れわれは断片になり、そのすばらしい能力を使ういかなる課題も見出せなくなる」といい、その典型をファウストに見た。ファウストは最後には「農業局の役人か何かのように土地改良をするのが関の山だった」(Auto 475)というのだ。ファウスト＝ゲーテの達成と限界に対する彼の視線は実に両義的である。

要するに、イエイツ晩年の創造力の源は、ゲーテ的「中庸」と「諦念」を否定し、老いの自覚と死の予見を契機として現世と超越との軌轢を保持し続けたところにあると見ていいだろう。ブルームは、イエイツが創造力の絶頂で息絶えたと見るのは好意的すぎるという。彼は、たとえば“The Circus Animals’ Desertion”におけるイエイツの、はしご、すなわちテーマを失った嘆きを何の巧緻も韜晦もない本心と見、「はしごの始まる場所を知ること、より高い段に登りたいということを意味しない」のだから、彼は「心の中の汚いくず屋を選んだわけではない」が、自らいうようにそこに「横たわらねばならない」(459)と突き放す。しかしアンタレッカーは、若い日の作品“Rosa Alchemica”の中の言葉、“all life proceeds out of corruption”を引き、それを土台にして“the foul rag and bone shop of the heart”を、“that most fecund ditch of all”(“A Dialogue of Self and Soul”)や“The fury and the mire of human veins”(“Byzantium”)と同定し、これを芸術的創造力の源として肯定的に捉える(289)。一方ボーンスタインはそこまでの肯定は保留し、たしかにこの詩は「心を寿ぐものではないが、すべてのはしごがそこから始まることを認識している」と、イエイツが現状を「認識」していることの重要性を指摘する(92)。

イエイツの「神格化」に対するブルームのような牽制はたしかに重要だが、ボーンスタインが指摘する「認識」は、イエイツが自分の墓碑銘と思い定めた“Under Ben Bulben”(ちなみにブルームはこの詩を他の最晩年の詩ほど高く評価しない)で、“In Drumcliff churchyard Yeats is laid”(375)と、自らの名を出すことで自分の死を客観視しようとする態度に通じるものだろう。これはゲーテが「ドルンブルクにて」で、「やがての日 太陽は赤々と別れを告げながら／地平線の周囲を金色に燃え上がらせるだろう」(柴田 50)と、「自分のそう遠くはない死の日」(同書 53)を描いているのと同じ精神であり、ハイデガーが「死への先駆」という概念によって自分の死を先取りし、それによって生の本来性を取り戻そうとするのと、あるいは三島が、老いという不治の病をもつ人間の生をいかに美しく終わらせるかという命題を自らの前に掲げることで、老いを先取りし、その醜さを想像することによって自らの創造力を掻き立てたのと同断の巧智である。だからこそイエイツはこの詩の最後で、“Cast a cold eye / On life, on death. / Horseman, pass by!”(376)と、自らを生から死へと渡っていく騎士になぞらえ、そのどちらにも執着せず、自己を生からも死からも切り離し、ただ「冷たい目」、すなわち冷徹な認識を投げかけろと命ずるのだ。ここには、自己をとことんまで突き放し、無執着の境位に放り出すことで、創造力の衰えを乗り越えて最後の創造の炎を燃やそうとする意志の姿勢が見て取れる。生の中にテーマを失った後も、決して宗教的解放を望まず、ひたすらに生と死に冷たい眼光を注ごうとする。これこそ神を失った後の世代の詩人イエイツの目覚しい面目であろう。

人は年を重ねても自動的に賢くなるわけではない。「人生を真剣に受けとめ」、それについて「自発的に内省」し、その「経験を分かちあう仲間」がいて、そして「学んだことをもとにして話したり行動したりする勇氣」(ローザック306-7)があるという条件を満たした少数者のみがこの榮譽に浴する。ゲーテもイエイツもこの条件をかなりの程度満たしていたが、その最大の原因は、二人が営んだ芸術という創造行為が、おそらくは瞑想と並んで最良の内省であるという点にあるだろう。彼らは、他の偉大といわれる芸術家や思想家と同じく、常に人生を真剣に受けとめ、内省し、それを創造行為へと結びつけることによって、人生を自動的に時の経過ではなく、まさに「知恵」を身につけるプロセスへと錬金術的に転換した。

ゲーテとイエイツは、時代背景の違いもあり、神や超越に対する見方には違いがあるが、老いと死と創造力との関係という点に限っていえば、その共通性は著しい。ともに若さを失ったことへの嘆きとノスタルジアは人一倍強く、それを創造の一源泉ともしているが、しかし老いと死への透視がもたらす叡智から深く汲み取り、これへの自負を若さの喪失と衝突させることで自らのうちに摩擦を生み、それを創造の巨大な源とした。老人の大半は、悔恨、激情、怒りといった否定的感情の犠牲になるが、二人はこれを錬金術的に能動的な力へ変えていった。三島のように老いを「病」とは考えず、人間の生という現象にあくまでこだわり、老いをも含めたその全体に眼を凝らし、認識しようとした。その視線は必然的に老いの向うにある死へも向けられた。その凝視の強さこそが、老いを創造力の源泉にかえるという二人の「錬金術」の根底にあるものであった。

注

- (1) ゲーテ『ファウスト』「悲劇第2部(下)」220-21。以下、『ファウスト』からの引用はすべて同書からとし、その際、「悲劇第1部」を1、「悲劇第2部(上)」を2、「悲劇第2部(下)」を3とし、その後には頁数を記す。
- (2) Yeats, W. B. *The Poems*, 348。以下、イエイツの詩の引用はすべて同書からとし、頁数のみ記す。
- (3) すでにフロイトは1923年にこの手術を受けており、その効果についてもある程度信じていたようだ。
- (4) 彼の「われわれ近代人」(『ゲーテとの対話』上、110)という言葉にこの自覚を見ることができる。手塚富雄もゲーテの本質を「近代的ヒューマニスト」(3: 273)と見ている。
- (5) しかしアンビヴァレンスの詩人イエイツはドロシー・ウェルズレーにこうも書いている。「たぶん私はあなたを失ったのでしょう。というのも、私の孤独感の一部は、若者にしかできない体験、すなわち深い思想の共有と、そしてその後の接触というあの生の至高の体験をもう二度ともつことはないだろうと感じているからです」(Albright 791)。性的なおのの濃厚にする「接触」を「思想」の後におくことで、若者でさえ「思想の共有」を第一に求めるとはめかしている。
- (6) ゲーテはこの「人智の究極の帰結」を、人々の協力・協働にもとづく一種の運命共同体の実現に見ているが、この点については *On the Boiler* を書いた晩年のイエイツはもっと個人主義的であった。しかしその一方で、アイルランドを古代ギリシアやビザンティン帝国と同定してその共同体の復活を願っている。イエイツが理想化する、しばしば「ファシスト的」と目される賢者・強者の共同体は、共同体の重視という点でゲーテとの共通性が感じられるが、同時に、その優生学的思想はゲーテには見られないものだ。

引用文献

- エッカーマン 『ゲーテとの対話』(上)(中) 山下肇訳、岩波文庫、1968年。
- ゲーテ 『詩と真実』第二部、山崎章甫訳、岩波文庫、1997年。
- 『ファウスト』「悲劇第1部」手塚富雄訳、中央公論社、1974年。
- 『ファウスト』「悲劇第2部(上)」手塚富雄訳、中央公論社、1975年。
- 『ファウスト』「悲劇第2部(下)」手塚富雄訳、中央公論社、1975年。
- 柴田翔 『晩年の奇蹟 — ゲーテの老年期』 ノースアジア大学出版センター、2012年。
- シュタイナー、ルドルフ 『ゲーテ — 精神世界の先駆者』 西川隆範訳、アルテ、2009年。
- スピノザ 『エチカ』『世界の名著25』 工藤喜作、斎藤博訳、中央公論社、1969年。
- ニーチェ、フリードリヒ 『ツァラトゥストラ』 手塚富雄訳、中央公論社、1973年。
- 『悦ばしき知識』 信太正三訳、理想社、1974年。
- 三島由紀夫 『太陽と鉄』 講談社文庫、1971年。
- 『天人五衰』 新潮文庫、1977年。
- 吉本隆明 『老いの超え方』 朝日新聞社、2006年。
- ローザック、セオドア 『賢知の時代 — 長寿社会への大転換』 桃井緑美子訳、共同通信社、2000年。
- Bloom, Harold. *Yeats*. Oxford: Oxford University Press, 1970.
- Bornstein, George. *Transformations of Romanticism in Yeats, Eliot, and Stevens*. Chicago: The University of Chicago Press, 1976.
- Eliot, T. S. “Yeats,” *Selected Prose of T. S. Eliot*. Ed. Frank Kermode. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1975.
- Foster, R. F. *W. B. Yeats: A Life II: The Arch-Poet*. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- Unterecker, John. *A Reader's Guide to W. B. Yeats*. London: Thames and Hudson, 1977.
- Yeats, W. B. *Autobiographies*. London: Macmillan, 1980. (*Auto*)
- . *A Vision*. London: Macmillan, 1925.
- . *The Poems*. Ed. Daniel Albright. London: J. M. Dent, 1994.
- Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray. The Portable Oscar Wilde*. Ed. Richard Aldington and Stanley Weintraub. Harmondsworth: Penguin, 1981.